織田信長時空戦記

三國志偽伝

第一章　桶狭間

又左は夢の中にいた。
闇の中をやみくもに歩いていく。背にかつぐ朱色の大身鑓がズシリと重かった。
進む先に、ポツンと灯りが見えた。周囲の暗闇に喰い尽されそうな、頼りない灯り。その中にひとりの男が立っていた。
和装の腰には二本の太刀、漆黒の鞘に納まった備前長船光忠と朱と金箔で彩られた豪奢な鞘に納まった脇差、不動行光だ。どちらも後世まで名を残す、不世出の名刀だ。異様だったのは身につけている甲冑だった。威し糸の和の鎧ではない。黒光りする南蛮胴の鎧に中国の通貨である永楽通宝の刻印が刻まれている。その甲冑の上から紅いビロードのマントをはおっていた。
全く来歴の違う和と洋の装備だが、ちぐはぐな感じは一切せず、不思議なくらい美しい調和がある。
闇の中で光が揺れ、和装に南蛮胴の男の顔を一瞬照らした。総髪をなびかせ細面の口元と顎にはうっすらと髭がのびている。何より印象的なのは切れ長の瞳だ。腰の刀よりも鋭いであろう眼光が揺らめいていた。
又左は走った。気がつくと、足元は不安定な泥沼になっていた。一歩足をすすめるたびに不快な泥濘が着物の隙間から侵入してきた。
「信長様」
どんなに進んでも一向に縮まらない二人の距離に業を煮やして、又左は叫んだ。
だが、信長と呼ばれた男は何も答えない。
「お願いです。許して下さい。俺も一緒に戦わせて下さい」
又左は泥濘に両手をつき土下座した。顔を舐腐臭のする泥がめる。
気配がして、又左は顔を上げた。気づくと、すぐそばに信長がい

た。
「信長さ、ま」
和解を期待した又左の顔は、一瞬で失望に変わった。
信長の端正な顔は能面のように無表情だった。ひとつ違ったのは、その眼光だ。そこには、どんな敵を見るよりも強い憎しみの色が浮かんでいた。そして汚いものでも見たかのように、クルリと踵を返した。
又左は太ももまで泥につかっているのに、泥濘の上を何事もないかのように歩く信長。
今、追わないと一生会えない。そんな恐怖が又左を支配した。まるで泳ぐように、泥の中を進む又左。しかし、ふたりの距離はどんどんと離れていく。
ふと、信長が足を止めた。そして虚空を見上げる。その様子が異様だった。まるで、戦場で敵兵を見つけたかのような油断のなさがあった。又左も信長と同じ方向を見た。
何だろうか？　稲妻のようなものが光っている。奇妙だったのが、稲妻はすぐに消えるのに、それはいつまでたっても消えなかったことだ。蛇のようにうねる三本の稲光は、どんどんと大きくなってくる。
「ひぃ」
どんなに危険な戦場でも悲鳴を上げたことがない又左が叫んだ。
三本の稲妻は龍だった。赤、青、白の三色の龍がお互いを食み合いながらこちらへやってくる。赤龍が青龍の腹を食い破り、青龍は白龍の脚を引きちぎり、白龍は赤龍の喉笛を引き裂いていた。
三匹の龍がお互いを食いあうのをやめた。彼らの目の前には、信長がいる。信長は、腰の備前長船光忠を抜き放った。その瞬間三匹の龍が信長に襲い掛かる。
赤龍は腹をなぶり、青龍は腕を噛みちぎり、白龍は喉に牙を突き

たてた。まるで烏が子鼠を引きちぎるように、龍たちは信長の肉を引き裂き食べる。
「信長様」
朱色の大身鑓を背から抜いて構えた瞬間、血だらけの信長が睨んだ。
その眼光は恐ろしく冷たかった。
そう、あの日、信長の寵童を殺した又左を睨む眼光と同じくらい冷酷だった。

※

気づけば、もう昼だった。空は晴れ渡り、強い太陽の日差しが窓から差し込み、気持ちのいい風が戸口の方から吹いていた。
又左は立ち上がった。悪夢のせいで着衣がぐっしょりと汗に濡れている。
前田又左。別名、鑓の又左と呼ばれるほどの武芸者だ。スラリとした細見の長身。だが、腕に覚えのあるものが、その所作を見れば単なる優男ではないとわかるだろう。事実、細身ながら鋼のような筋肉が骨格をまとっている。
髪は信長と同じく総髪。肩までかかる髪は城下町の町娘もうらやむほど艶がある。女たちの羨望を集めたのは、髪だけではない。その鼻筋の通った美しい顔立ちもそうだ。祭りで又左が女物の着物を着て踊れば、たちまち黒山の人だかりができたものだ。
「やれやれ、やっと起きたかい。人に透波働きをさせといて、気軽なもんだね」
見ると戸口に、山伏姿のひとりの男が立っていた。中肉中背、太い眉は愛嬌があるのに、その下の眼は鋭い。
又左は軽く苦笑して、手ぬぐいで汗をぬぐった。ここは尾張の村

落。ふたりは百姓から借りた小屋に前夜から泊っていた。中には、薄っぺらい布団と朱色の大身鑓、そして使いこんだ甲冑が置いてある。

「で、文吾、どうだ、今川の動きは」

「圧倒的だな。織田の砦を次々と焼き払っている。接戦にでもなれば、どさくさに盗賊働きもできそうだが、ここまで一方的だとそれも無理そうだ」

文吾と呼ばれた中肉中背の男は忌々しそうに報告した。だが、それを聞いた又左はもっと不機嫌そうな顔をした。

「今川の本隊はどこにいる」

「ぼちぼち進軍中だ。本隊が戦うまでもない、別動隊だけで勝負がつきそうだ。あんたの好きな殿様は援軍を送るでもなく、戦おうともしない。ご立派な大将だぜ」

報告を聞きながら、又左は汗で濡れた着衣脱ぎを捨てた。鋼のような細い筋肉が浮かびあがる。その上に着込むのは、女物の着物を戦衣に改造した派手な上着。さらに虎皮の袴をはき、対鉄砲戦用に開発された鋼製の一枚胴、通称〝当世具足〟と呼ばれる鎧を着込む。腰には大典太光世の長刀と無銘の脇差。そして、背中には朱色の大身鑓を背負う。

大身鑓というのは、鑓の穂先が異様に長い鑓のことだ。普通の鑓の穂先は三寸～七寸（一〇センチ～二〇センチ）、対して大身鑓は一尺～三尺（三〇センチ～九〇センチ）、太平洋戦争時に焼失した天下三槍のひとつ御手杵は四尺六寸（一三八センチ）もあったという。又左の朱鑓の穂先は、三尺五寸（約百センチ）はあろうか。柄の部分が三尺と穂先よりも短いので、見ようによっては奇妙な形をした長剣のようにも見える。

「大将、念のために聞いておくが、どっちの味方をするつもりだい」

戸口から出た又左の背中に、文吾が声をかける。

「すまねえ、やっぱり織田の大将はほっとけねえわ」
振り向いて答える又左の顔は晴れやかな笑顔だった。
「あんた、噂によると殺されかけたんだろう、その織田の大将に」
又左は腰に手をやった。そこには大典太光世の長刀と無銘の脇差が差している。又左は、後世に天下五剣と呼ばれることになる長刀ではなく、名もなき脇差を愛しそうに撫でた。
武士が普段から持つ脇差には、鞘の柄口の部分に笄と小柄というものがついている。笄は櫛のようなもので頭髪を整えるもの、小柄は今でいうペーパーナイフのようなものだ。しかし、どうしたことか、又左の脇差にはそのふたつともがなかった。
「殺したくなるくらい、俺のことが好きなのさ」
文吾は庭先につないだ馬を引っ張って又左の前に連れてきた。
「違うだろう、殺されてもいいくらい信長のことが好きなんだろう。落城寸前の城主に惚れるなんて、この下剋上の世にあんたほどのたわけもいねえな」
ニヤニヤと笑う文吾を無視して、又左は馬にまたがった。馬上の人になった又左は懐から袋を取り出して、文吾に投げつけた。
「主の嫁さんを寝とって放逐した、流れの透波に言われたかねえよ。それは報酬の前払いだ、俺の大好きな織田の大将のとこまで案内してくれよ」
「あいよ、ちなみにこれは半金だぜ。戦が終わったら、あんたの腰にある典太光世をいただくぜ」
「強欲だねぇ。まあ、戦が終わって万が一でも生き残ってたらやるって。で、信長様は今どこだ」
「清州の城だよ。打ってでる気配がない。籠城して、今川の兵糧がなくなるのを待つつもりだろうよ」
そう訳しり顔で話す文吾を、又左は笑った。不思議と嫌味な感じがしない、透きとおるような笑顔だった。

「あのお方が、黙って籠城するはずはないさ。きっと打ってでる。だから、その動きを絶対に逃さず俺に伝えろ。俺の居場所は打ち合わせどおりに狼煙をあげて知らせる」
そう言って、又左は馬を走らせた。
「ちぇっ、あの大軍を相手に打ってでるだと。夜襲ならともかく、この昼間にねぇ。まあ、もらった金の分は働くけどな」
そう言って、文吾は跳躍した。
さっきまで又左がいた小屋の屋根の上を跳ね、庭の大樹の枝を蹴って、瞬く間に森の中へと消えていった。
空は晴れ渡り、太陽は強い日差しで大地を照らす。木々の向こうにはうっすらと土埃があがっている。今川の大軍三万の存在を示す土煙は朝方から上がり、時刻をおうごとに濃くなっていく。対する織田軍は二千。まるで亀のように清州城に立てこもっていた。

※

清州城には、不穏な空気が流れていた。城郭の中庭には、甲冑を着込んだ織田軍の諸将がそろっている。苦虫を噛み潰したような顔を浮かべているもの、せわしなくあちこちをウロウロしているもの、周囲に聞こえるように舌うちをしているものなど、みな不安と不満を体中に貯めこんでいる。
ポンと、彼らの気持ちをあざ笑うかのように鼓の音が響いた。中庭には舞台があり、そこでひとりの男が舞っていた。能面をつけているので表情はうかがいしれないが、総髪の髪がフワリフワリと舞の動きにあわせて揺れいてる。純白の袴に朱色の上着を着込んでいる。きっと下着も何枚も着ているのだろうか、着ぶくれしているように見える。
殺気と狼狽が埋め尽くす陣屋にあって、能面の男の舞は異様だっ

た。まるで彼らを嘲笑うように、舞は淡々と進んだ。

「可成よ、まさかここまで殿がうつけだとは思わんかったわ。今、こうしている間にも、次々と砦を落とされているのだぞ」

傷と髭で覆われた顔をした大男が呻くように、横の男に呟いた。

「勝家殿、籠城も立派な作戦のひとつですよ」

可成と呼ばれた男が、涼しい顔で返す。こちらも鬚の大男と同じくらい大きな体をしている。違うのは、鬚の男が筋肉も脂肪も相応についた体なのに対して、こちらは脂肪がほとんどついてない。眼尻にあるわずかな皺や髪に混じる白髪、そして何気ない所作の貫録から、年のころは三十代の後半ぐらいだろうか。

整った顔立ちは、若いころは随分と美男子としてもてはやされただろうことを想像させた。しかし、この男が異彩を放っているのは、顔立ちだけではない。杖のようにして持つ、使い込まれた異形の鑓が、そのことを物語っていた。純白に彩られた柄は太陽の光を受けると銀色に見えた。そして、その先には十文字の刃先が輝いていた。鑓の穂先に刻まれた〝人間無骨〟の文字が、異形に凄味を持たせる。

男の名は、森可成。織田軍団随一の武芸者として知られている。歳は三十七。戦場では銀の十字鑓を操り、今川軍や斉藤軍の勇者を何人も血祭りに上げている。ちなみに整った顔立ちは息子たちにも遺伝された。信長の後の小姓森蘭丸は彼の息子である。

「だからといって、芸能にうつつを抜かす暇などあるまい。例え口先だけでもいいから、兵の前に立ち士気を鼓舞すべきではないか」

鬚の男は握り拳をつくった。

今、舞っている能面の男こそが、織田信長だった。

先ほどから、織田軍の砦から後詰を求める使者が続々とやってきている。しかし、信長は、それらの報告に何の指示も出さないでいた。だけならまだしも、先ほどからは甲冑も脱ぎ棄て能面をつけて

舞を楽しむ始末だ。
「うつけな主ということは、先刻承知していたはず。だからこそ、先年信長殿に反旗を翻したのだろう」
森可成が皮肉る。
鬚の男が、「それは言わない約束だろう」と気弱な態度を見せた。
鬚の男の名は柴田勝家。彼も織田軍団きっての猛将だが、先年信長の弟信行が反乱したときに信長と兵火を交えたという前科がある。
「こんなことなら、あの時駿河に亡命しとくべきでしたな。今となっては、城を枕に討ち死にするしかないでしょう」
そういって、可成は勝家の肩をバンバンと叩いた。勝家は、その手を振り払った。
「うつけの舞いを眺めるだけで戦況が有利になれば苦労はせん。せめて、兵糧や弾薬の量だけでも確認してくる」
そう言って、勝家は肩を怒らせながら歩いていった。
「ただのうつけではないのは、あんたがよく知ってるだろうに。案外、俺達の見えないところで手を打っているかもしれんぞ」
そう誰にも聞こえないぐらいの小さな声で可成はつぶやいた。
可成が注目していたのは、舞っている信長ではなかった。十字鑓の持ち主の視線は、広場の隅で腕組みしている男を捉えている。鉄砲戦用の最新の鋼の当世具足を身にまとい、赤い母衣と呼ばれるマントのようなものを背中に背負っている。
見ていると、彼に次々と話かける男たちがいる。汗をしたたらせた額とせわしない呼吸が、その男たちが先ほどまで走っていたことをうかがわせた。そして、その男たちの報告を聞くと、赤い母衣を背にまとった男は、手を顎のところに持ってきたり、腕を頭の後に組んだりと姿勢を変えている。
その所作は何気ないが、舞台の上にいる信長に向けているようにも見える。鼻先を蜂がかすめても赤母衣の男の体勢が変わることが

なかったことからも、それらの姿勢が何らかの意味を持っていることは間違いなさそうだった。
この男は、信長が編成した精鋭集団・赤母衣衆のひとりである。親衛隊としての個人的戦闘力はもちろん、将来の実戦指揮官としての軍隊統率力もあわせもったエリート中のエリートである。その数、十名。さらに黒母衣衆と呼ばれる同様のエリート集団もいて、彼らも十名で編成されている。
本来なら、ここに又左がいるはずなのにな。
赤母衣の男の不可解な行動を見ながら、可成は思った。女のような美形に、スラリとした長身がすぐに思い浮かぶ。赤母衣衆筆頭という肩書が、信長からの信頼を表していた。しかし、先年のある事件がもとで、信長からの信頼は憎しみへ一変することになったのだ。それ以来、織田軍団を追放され、流浪の身となっている。
舞台の上では舞が続いている。信長が、扇をポトリと落とした。
それを見た、赤母衣の男の顔色がサっと変わった。そして、先ほどまで息を切らしながら報告していた男と共に足速に陣屋を出ていった。
他の諸将が狼狽と困惑の表情を顔に浮かべる中、彼らの行動にだけ意思の強さがあった。しかし、それに気づいたのはただひとり、森可成だけであった。

赤母衣の男、名前は伊東清蔵と言う。織田軍では鑓三本と呼ばれるほどの鑓の達人で、前田又左追放後、赤母衣衆の筆頭としてエリート集団を指揮していた。釣り上った両眼が、意志の強さを感じさせる。その面構えが示すように、戦場では又左とともに先陣争いを何度も演じた男だ。実力は又左に一歩劣ると思われていたが、その命知らずな一騎駆けは何度も織田軍に勇気を奮いおこさせた。
陣屋を出た伊東は、走り出した。すぐさま同じく赤母衣を背にお

った数人の男が並走する。
「橋介、本当に雨が降るのか」
「ああ、間違いない。国境の村の長老は天気を当てる名人だ。長島の森に狐のしっぽのようなカスミがかかったら、一刻後には雷雨がくるそうだ」
「規模は？」
「それは、わからん。すぐやむときもあれば、三日たっても雨が降り続く時もあるらしい」
「確かなのは、一刻後ということか」
「ああ、ここから田楽狭間までギリギリ間に合うかどうかだな」
男たちの足が止まった。
「貴様、どうしてこんなところに。斬られても文句はいえんぞ」
そう怒鳴る伊東清蔵の目の前には、長身の男が立っていた。派手な女物の服を改造した羽織に虎皮の袴、背には鮮やかな朱の大身鑓。前田又左だ。
「清蔵、頼む信長様にとりなしてくれ。俺も戦いたい」
「戦いたければ、足軽小屋に行け。今川の大軍相手だ、お前みたいな因果持ちでもいないよりはましだろう」
通り過ぎようとする伊東清蔵の肩を又左がつかんだ。
「違う、俺は信長様の側で戦いたいんだ」
「それは無理だ。お前が現れた瞬間、刀を抜くはずだ。悪いことは言わん、足軽小屋へ行け」
又左の手を払いのけて、伊東は走りだそうとした。
「待ってくれ、それじゃ駄目なんだ」
通せんぼするように立ちはだかる又左。
「清蔵、こいつは犬と同じだ。言ってもわかんねえよ」
それは、氷のように冷たい言葉だった。見ると、そこに伊東と同じように赤母衣を背負ったひとりの男が腰を落として、今にも刀を

抜かんとしていた。つららのような細い顎に、暗い光を放つ双眸が、言葉の冷たさをさらに増していた。
長谷川橋介、赤母衣衆の一員で抜刀術の遣い手である。撃剣の速さでは、織田軍中に比肩するものはないと噂されるほどの早業の持ち主だ。
「頼む、仲間にいれてくれ」
懇願する又左への長谷川の返答は、間合いを詰めることだった。この男は、かつての仲間でも何の躊躇もなく斬ることができる。そういう冷たさを持った男だ。彼らについてきていた赤母衣衆に緊張が走った。
長谷川の撃剣の射程距離に、又左の首が入っている。
「田楽狭間へいけ」
ポツリと、伊東が答えた。
伊東を睨みつける長谷川。その氷のような視線が、伊東の言ったことが軍事機密にあたることを物語っていた。
「今すぐか？」
「俺たちはお前にかまっている暇はない」
それがライバルであった元同僚への精一杯の返答だった。
「かたじけない」
そう言うやいなや、脱兎のごとく又左はかけだした。
「感心せんなあ。軍事情報を漏らすとは。本来なら討ち首ものだぞ」
伊東と長谷川の背後から陽気な声がした。先ほどの又左と同じくらいの長身の男が、銀色に輝く異形の十字鑓を抱えている。森可成だ。手品の種を見破ったような得意気な笑みを顔一面に浮かべている。
「籠城戦は退屈だと思っていたところだ。悪いが、お前らと一緒に先駆けいかせてもらぜ」
十字鑓がギラリと太陽を反射させる。

空はまだ晴れ渡っていた。西の方から厚い雲が雷を伴って、田楽狭間へと向かっていることなど予想もできないほどに。